



北海道バスケットボール協会

指導者育成専門委員会

2007 / 8 / 9(木)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 1

「2007年全道中体連函館大会を観て」

8月3日から函館市で中体連の全道大会が開催されました。本来委員長の私(幸丸)が赴いて大会の雑感をリリースするところですが、別の大会に引率していて、函館にはいけませんので、中学生のバスケットボールには最も厳しい分析が出来る秀島先生にお願いして、今後指導者の皆さんが参考になるゲーム運びやベンチワークについて原稿を寄せていただきました。ゲームの駆け引きの中で秀島先生ならこうする等、参考になる事が多いと思います。文中、秀島先生が審判にバスケットボールはベンチと審判が協力して選手を上達させるものだとの旨を述べられていますが、近々審判委員会の加藤委員長にも判定が目指す方向についてこのブログで語っていただきます。

札幌市立平岡緑中学校 秀島 起也

男女とも優勝候補筆頭が順当に優勝を成し遂げ、大会は閉幕した。

<男子> 東海大四中はここで引き離すといった場面をよく心得、コーチと選手が同じ感覚で一気に持つ力があつた。地区予選から観ていたが、集中力をあげる・今に集中する力は中学生離れしている。アップの声の出方から、他のチームとは違う。必ず勝利するんだという意志が強く伝わってくるチームであり、まさにラグビーのオールブラックス(ニュージーランド)の如きである。流れが悪くなると、「我慢だ！」自分たちで鼓舞し立ち直らせる。あの集中力があれば、多少の技術の問題はカバーできる。バックスクリーン、フレアスクリーンをエース平野君が使えるようになるとオフェンスのバリエーションが増え、平野君もスクリーンの後プレイしやすくなるのではと感じた。

湯川は、能力のある選手を3名揃え優勝候補の札幌厚別北を準々決勝で破り、地元の大応援を受けながら伸び伸びプレイで勝ち上がってきた。残念ながら2日目女子会場にいたため、戦いぶりは1日目と最終日しか観ていないが、相手を出し抜くワンパス速攻、リバウンドで相手がボールをおろした瞬間のスナップ、ロールターンをし始める際のドリブルスチールなどあの感覚がすばらしかった。しかしながら、スペースの作り方(動きの工夫)、ディフェンスが淡泊なこと、ゲーム中別のことに意識が行くこと、すぐ転ぶこと、マナーの面など全国へ向け修正する部分が多々ある。試合の終わり方も、是非勉強してほしい。イケイケだけでは、全国上位進出は難しい。もし自分が対決していたら、2名を徹底的にフェイスガードで押さえるディフェンスを出していたと思う。

<女子> 旭川緑が丘vs札幌北栄のゲームは、見所が随所にあつたゲームであつた。いかに緑が丘が相手の長身センターを押さえるか。ノーマルのマンツーマンで押さえにかかったが、あのぐらいの徹底さでは不十分であつた。周りの助けがもっと必要になる。周りが常に長身センターへのパスカットを狙わなければならない。フロントについて、裏のパスカット。バックについて、ガードの位置からの表のパスカット。たとえパスカットできなくても、狙っていればすぐにダブルチームにいったはずである。しかし、逆転に結びつけた執念、ゾーンプレスは見事であつた。4番のバスケットをよく知ったプレイには脱帽である。東海大4と同じくここでという集中力を持ち合わせたチームである。走るべき場面をよく知っている。無理はしない。

ミスしない一番早いプレイを知っている。弱いチームは、ミスするゲームのスピードがどの程度か理解していない。長身選手の押さえ方を修正し全国上位を狙ってほしい。

北栄は、よいオフェンスを展開していた。中外、左右バランスよくボールを回していた。センター同士のあわせも今大会一である。必ずボールが入れば、逆センターがプレイしていた。当たり前のことをしっかりやっていた。ディフェンスでも緑が丘のコンビネーションをよく押さええていたが、試合の流れを読めないガードが問題であった。ゲームを作れず自分でやりすぎる場面が残念であった。また、4ピリにプレスではまってしまった。7点差をつけられたときにすぐにタイムアウトを取り、プレスダウンとその後のオフエンスを指示するべきであった。コーチは、取ろうと立ち上がったが迷って流れ、その後のオフェンスでミス、その時に取ってしまった。その後相手ボールから始まると考えると遅かった。ここが、ポイントの一つであった。3連覇は難しい。しかし、3年連続夢舞台への出場である。コーチ・選手・保護者・校長もベンチに入る学校体制、全ての力の賜である。

2日目北栄に負けはしたが、帯広第六のセンターを押さえるフロントディフェンスは参考になる。セカンドシュートを決められはじめたのが痛かった。あそこでセンターの後ろからつくディフェンスに変えることができたなら…。しかし全員下級生。見事な戦いぶりであった。

全国に向けては、競り合ったときのゲーム運びが問題になる。あらゆる場面を想定して練習してもらいたい。追い上げるためには？逃げ切るためには？フリースローをもらいにいくには？スローインされる前に上手にファールするには？

ゲームの終わり方に甘さが残るチームを数チーム観た。たまたま、シュートが入って喜ぶコーチもいた。全道大会らしく、勝つための戦術を理解したチームが出場しなければならない。100点差でも、1点差でも勝ち負けは勝ちである。

暑い中、審判の皆様お疲れ様でした。たいへんなのは十分承知の上で苦言を申し述べたい。選手のプレイを伸ばすのも、止めるのも審判に左右されます。この後のプレイが観たいと思った瞬間に切られる笛を何度も観た。まだ、頑張らせる場面で我慢できず鳴らしてしまう。見えたから吹くのではなく、観て吹くのである。ゲームにマッチした、選手・コーチとポイントが一致した笛を期待したい。

以下、自分が心がけていることや今大会のみならず試合を観ていて感じることを羅列してみた。指導者の皆様に参考になれば、幸いである。

1. タイムアウトの取り方

①リードしているときは、できる限り取らない。相手に追いあげる方法を確認させてしまう。しかしながらプレスダウンがうまくいかず追い上げられたときは、確認し、流れを切る。ディレードゲームの指示ぐらいでは、取らない。時間と点差を計算し逃げ切る日頃の練習（意識）が大切。

②7点差をつけられたときに、1度目のタイムアウトを取る。
3Pを決められると10点差になってしまう。10点差のリスクは大きい。

③自分たちのボールから再開されるときに取る。次のオフェンスの指示が出せる。
(スローインのプレイ、ナンバープレイ、プレスダウン、ディレイドなど)

2. 相手をおさえる

①どの選手をおさえたらよいのか。ガードか？センターか？
どのプレイをおさえるのか。ドライブインか？アウトサイドシュートか？

この指示が重要。見極めが重要。大胆さが足りない。考えている人が少ない。

②どの種類のディフェンスがよいか。マンツーマンか？ゾーンか？フェイスガードか？

トライアングルマンツーマンか？コンビネーションか？プレスか？

最低3種類ぐらいのディフェンスは必要。

練習しているディフェンスを早めに1度使う。終盤になるとなかなか変える勇気がわいてこない。どのディフェンス通用しているのか。ハーフタイムで選手に聞く

こともひとつの手。

3. どこを攻めるのか、誰で攻めるのか

①的確な指示が必要だし、どの選手から1対1をしかけるのか？ある程度のパターン練習が重要。

②今はファールをもらうことが最重要という時期がある。ボディブロー。インサイドに入れる。ドライブインで攻める。なのに、アウトサイドからポーン？

③攻めているように見せて攻めない巧みさ。終盤7点差あれば1度ぐらいいは24秒取られても平気ぐらいの感覚でゆっくり攻める。ぎりぎりでファールをもらえれば理想的。リバウンドを取ったらまた回す（ノーマークでも回させることがおしゃれ、日頃の指導）、リバウンド後すぐ打つチームが目立つ。

4. その他

①長身選手…一つ目のパスで攻めるのは、まだ難しい。2つ目のパスをもらって攻めさせる（リターンパス）。リングを見るのは難しい、インサイドの様子を見させる。

②スローイン…1発勝負のスローイン。連続性のあるスローイン。続きをさとられない。スローインする選手は、味方を見ないで、コート全体を見ながら、スローインプレイのコールをする。10点取る。

③飛び込みリバウンドの重要性。あけたスペースへ。内側を取る。

④審判へのアピール…ここぞという時のアピール。手のファール、スクリーンのファール、リバウンドのファール、何が間違いなのか伝える。感情的にならないように。処置の間違いを指摘する。

⑤コーチの服装…襟の付いたシャツ。長ズボン。シャツは出さない。保護者、関係の目。

孟子曰く 『天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず』

戦いにおいては、天が与えてくれた絶好の機会を得たとしても、地理的条件の有利さにはかなわない。が、どんなに地の利があっても人心が一致している相手にはかなわない。